

TENTI・TODAY			1
会員の広場(受信メール)(私見)			2
随筆	「日々をいとおしみて」より 令和を迎えて	宮川典子	4
調査録	我が町秦野の歴史と現在(5)	北林文夫	6
歴史	「了解日本(日本を知る)」 (7) 中国の古い詩、日本では「漢詩」と呼ばれている	兪彭年	8
歴史	リトアニアで1万人のユダヤ難民に日本通過ビザ発給、彼らを窮地から救済した日本の外交官、杉原千畝とはどんな人だったのか(3)	佐川雄一	11
歴史	山縣有朋について(2)	臺 一郎	13
回顧	有楽町慕情(4) 「GHQに接收される」	津田孚人	16
事務局			18

TENTI TODAY

寒さ本番を迎え、天気予報は朝晩の冷え込みに注意と報じていますが、一方で北海道、新潟などの記録的な豪雪、冷え込みは半端でないようです。同じ国内での気候格差、どのように解決するか問題は大きいようです。一方、ウクライナ戦争、トルコ・シリアの大地震でも「何故こんな目に合うのか」と被害者は悲痛な声をあげていました。被害による格差をどのように解消するか、人間社会に提起された大きな課題です。

日銀の黒田総裁の退任が決まったようですが、日銀が政府の子会社化し、国債の半分以上を保有している現状は、どう見ても異常です。日銀出身ではなく、国際派で、スタンスは中立的と、報じられている新総裁に期待するところ大です。債務超過、金融政策不能問題など、国内では容認されていても、国際的にいずれ問題とされるときがあると考えられます。中央銀行は国民の信頼が不可欠、ぜひ信頼を取り戻してほしいものです。

大学、会社、共に2年先輩だった故市岡之和さんから、生前、本田芳江さんを紹介された。ご主人が市岡さんと、大学の野球部で一緒。昨年、本田さんから、宮川典子さんの随筆集「日々いとおしみて」をいただいた。年回りが半分以上違う宮川さんの随筆は教えられるところが多いので、早速、「ネットワークテーブル」に掲載することにした。先日、宮川さんから手紙を拝受、大学のゼミで一緒の藤田欣也夫妻は遠縁にあたるとのこと、また義理の母上が終戦後にハルピンから引き揚げGHQに勤務、さらに杉原千畝氏の奥様とも親しかったことが書かれてあった。不思議なご縁ですね、と宮川さん、当方も世の中狭いと改めて感じた次第です。

それにしても、宮川さんの達筆に驚きました。返事を躊躇しています。

会員の広場

受信メール

早速掲載(2022.12月号)していただき有難うございます。このところ充実して豊かな内容になってきていますね。貴君のご努力に敬意を表します。「第一生命館の履歴書」は私も持っていますが改めて隠れた矢野一郎氏の功績に感銘しております。今の若い社員にも伝えていきたい貴重な戦後史ですね。ご自愛のうえ益々のご活躍を祈ります。

(2022.12) 岩淵彰さん

私は、読み書き殆どダメ。目の前のカミさんの顔も見えない。貴メールも、PC内臓の読み上げソフトで、時間かけかけ、少しだけ・・・屋内外、ノロモタビクでの一年間。(ノロノロ:モタモタ:ビクビク)来年もそんな感じで・・・

(2022.12) 有田保彰さん

天地ネットワークテーブル、楽しく読ませていただいています。また1年間、ありがとうございました。津田さんの『有楽町慕情』、占領初期、会社の首脳たちの占領軍との駆け引きに興味をそそられます。私の知らないことばかりで、面白く読ませていただいています。

コロナへの不安もあって、このところすっかり引き籠もり状態。足も萎えてきました。津田さん、バスケの付き合いも途切れず、またよく出歩いておられますね。見習って頑張ってみます。

また来年もどうぞよろしくお願いいたします。

(2022.12) 寺島昭彦さん

メール版・530号ですか、すごいですね。発信の場があることで、救われている方はたくさんいると思います。拝読、楽しみにしています。

(2022.12) 岡崎史子さん

「天地」新年号ありがとうございます。昨年の12月号から続いた宮川さんの根岸小学校のお話、小学校の思い出はいつになっても懐かしいものですね。また杉原千畝のお話は再認識いたしました。また私の友人で第一生命に勤めておられて「ここがマッカーサーの部屋」と案内されたことがありました。何もない大きなお部屋でなんと天井の高かったことか。あらためて「有楽町慕情」で内実をしり、いろいろ勉強させていただきます。

いつも感じているのですが皆さんの文のすばらしいこと、楽しみにしております。

(2023.1) 石塚恵子さん

毎号、幅広い内容で、それぞれが充実していて、私としては、本当に勉強になりました。12月号での子規庵と書道博物館については、10年程前に行ったことがあります

すが、周りの環境が、何ともふさわしくなく思いました。台東区などで何とか手を打てないものかと思いました。

杉原千畝につきまして、満鉄の買収やヨーロッパでの活躍が並外れていたことが分かりました。スパイ戦は、当時の日本は、全く幼稚で、軽視していたようですが、そんな中で、大変だったと思います。戦後は、戦時中の政府の意向に反したということで、不遇だったようですが

第一生命本社ビルの明け渡しは、GHQは絶対ですから、緊張したと思います。そして、満足な食事も出来てない時だったので、それこそ、容易でなかったと思います。それにしても、途中で、GHQが日本側の要請を柔軟に聞いてくれたそうで、大したものだと思います。

天地を読ませていただいてから、視野が開かせていただき感謝いたしております。来年もよろしく願います。

(2022. 12) 酒井春雄さん

去年は、大変お世話になりました。今年も、お手数をお掛けますが、よろしくお願い申し上げます。

箱根駅伝で、監督について、触れられていますが、テレビで見たのでは、全寮制で、学業はもとより、日常の生活を含めて指導をしているようで、大変だなと思いました。中国が、今も旧暦だとは知りませんでした。私も、以前は、暦を買って“三りんぼう”とかを気にしていましたが、ここ数年、すっかり忘れていました。

第一生命館で、屋上にアンテナを建てて、無線で会議していたのが、ワシントンだけでなくロンドンともしていたのことに感心しました。先の大戦のとき、日本の海軍は、敵の飛行機や軍艦の監視は目視だったが、アメリカ軍はレーダーで、見えないところから攻撃していました。その元は、日本人の発明した八木アンテナ(今の TV アンテナ)で、占領地で発見して分かったようです。

これからは、寒さも厳しくなりますので、皆様にはおかれましては、お体にご自愛くださいますことをお祈り申し上げます。

(2023. 1) 酒井春雄さん

新年の第一弾は、見事な筆さばきでした！ GHQ は身近な話題として、拝読させてもらいました。駅伝の中継を、次男坊も関わって 20 年強になります。小生、立教卒後の最初の勤務会社が、宮ノ下の富士屋ホテルでした。外観は全く変わらず、ただ懐かしく、いろんな方のお顔を思い出していました。

慶応大学馬術部キャップ卒の織田芳彰兄は、富士屋ホテルの先輩でレストランサントリーをロンドン、パリ、ミラノ、ニューヨークと展開されました。

駅伝が復路日本橋の角にかかる頃は、女房に「駅伝を見に行くかな、と言っていた津田兄はこの付近に居られるよ」と話たり、番組最後のテロップで次男坊のフルネームが、早い内に流され、女房とハイタッチで喜びました。

大相撲は、私が御世話に成った松ヶ崎幼稚園 OB の「隆の勝」「琴勝峰」応援しています。

今年も、お元気に宜しくご指導ください。

(2023. 1) 北川新十郎さん

私見 大須賀 四郎 (85歳)

〔新聞について〕

ページ数が増えているが、両開きでない一枚だけのページが増え、読むうえで非常に不都合である。ページ数が増えてきている主なる原因は宣伝に使用される枚数の増加である。宣伝を出している企業は、よその会社とりわけ競争会社の名前が出てくるので自分の会社も負けずに広告ページを買うべく新聞社から煽られているのかもしれない。新聞社に上手に宣伝ページを買うようにそそのかされているようだ。

朝食を食べながら新聞を読む際にも一枚だけの新聞も有る。やたらにページ数を増やすのではなく、より内容を充実していただきたい。外国の新聞社の内容と変わらぬものが多い。特派員が自分で足を使い得た情報が欲しいものです。

〔参議院の存在不要〕

誠にお粗末な議員の存在が目につく。防衛費増額財源についての議論が賑やかであるが、参議院を廃止することを考えていただきたい。参議院の存在よりも自分の国の防衛の方がはるかに重要である。参議院廃止による費用セーブは防衛費に回せばよい。とにかく参議院制度の存続の積極的理由が見出せない。

〔文芸春秋への不満〕

正月号および二月号.どちらも特別値上げとなっている。読んでみたが、両方ともに、将来、現在がどうあるべきか、というよりは、過去の記事・論文で満載されている。つまり「過去」で生きている会社、過去の記事で稼いでいる会社であって、我が国の「現在」「将来」どうあるべきかを論ぜんとしている出版会社とは思えない。編集者ももう少し知恵を働かしてほしいと思う。

エッセイ集 宮川典子(94歳) 「日々をいとおしみて」(2022年11月)より

令和を迎えて

平成最後の土曜日の朝、私はテレビをつけたままのんびりと新聞を読んでいた。ふと「館林は美智子さまゆかりの土地でもあります」というナレーションが耳に入った。

館林は美智子さまの祖父正田貞一郎氏の出身地で、今も当時の製粉機が大切に保管展示されているそうだ。貞一郎氏は大変な努力家で機械に関する英文の解説書を読破し、自らこの製粉機を組み立てられたそうである。テレビにはそれ等と共に、現在の街並みや色鮮やかなつつじ公園が映し出されていた。

思い起こせば昭和20年、終戦直後のことである。当時、私の父母は育ち盛りの18歳を頭に6人の子供を抱えて、食べさせるのに大変な苦勞をしていた。そこへ館林に住んでいる伯母から「うどんを御馳走するからいらっしゃい」と誘いがあった。

私の家が3月の空襲で焼けた時、伯父が住んでいた小石川の辺りはまだ無事で、妹と私は暫くそこでお世話になった。4月、学校工場の疎開で長野へ行くことになった私たちを、伯母が名残惜しそうに見送ってくれた。

その後さらに烈しい東京空襲が続き、伯父一家は館林へ疎開して、終戦後もそのまま居続けていたのだ。

その日、妹と二人で満員電車を乗り継ぎようやく館林に着いた。相変わらず太っ腹の伯母は、あの時と同じように「まあ、よく来たわね。東京は食べ物がなくて大変でしょう。ここは幾らでもお粉があるから沢山食べて」と温かく迎えてくれた。伯父は単身赴任でいなかったが、元気な3人のいところがいた。

一番上が小学校6年生のまさ子である。隣の家には正田秀三郎氏のご家族が疎開しておられたという。そのご長女美智子さまとまさ子は、館林小学校の同級生で半年近く一緒に通学したそう。戦時中、疎開児童の多くは、地元の子供たちとなかなかなじめなかったようで、東京から来た二人、その頃は無二の親友であったことと思う。

伯母の作ってくれた夕食のすいとんに、私も妹もびっくりした。東京ではふすま入りの黒いぼそぼそしたものばかり食べていたのに、ここのは真白なもちもちの、ほっぺが落ちそうなすいとんである。それもそのはず、伯父は製粉会社に勤めていた。伯母が「明日はおうどんにしましょうね」と言ったので、それを楽しみにいこと夜遅くまでおしゃべりをした。

翌日、伯母は「あなたたち、もう少し早く来ればよかったのに。正田さんご一家は、先月、東京へお帰りになったの」と言いながら、隣家の留守居のおばさんの所へご挨拶にと、私と妹を連れて行った。御殿のような立派な家であった。

大勢いるいこの中で、私とまさ子は「子供の頃から特に親しかった。戦後、上野公園で美術展があるとよく誘い合わせて見に行き、帰りには公園内のうなぎ屋梅川亭に寄る。平成13年良寛の展覧会を見た時、まさ子が突然「私、大腸がんで昨年手術したの」と言う。顔色もよく、うなぎも残さず食べていたから信じられない気持ちだった。「でもよかったわ、こんなに元気になって」と言ったが、上野行はそれが最後になった。

翌々年、彼女はガンが再発し、私は病院に見舞いに行った。「典子ちゃん、もう絵を見に行けないけれど、私、今幸せなの」彼女は枕元にある一通の手紙を見せてくれた。それは恐れ多くも美智子様からのお見舞状だった。傍にいた彼女の夫が説明する。

「美智子様は、毎年お誕生日会に館林小学校の受持ちの先生をお招きになるのですが、その先生からまさ子のことをお聞ききになって……。もったいないことです。」まさ子はその一週間後、静かに旅立った。美智子様のお手紙を大切に胸に抱いたまま……

ある年、二人の妹と大相撲の初場所に出かけた。十両の取り組みの合間に「本日は、天皇、皇后両陛下がご観戦にいらっしゃいます」とアナウンスがあった。物見高い私たちは、相撲などそっちのけで、国技館の入り口にお迎えに出た。

館内は横綱朝青龍の土俵入りで賑わっていた。それが終わると大勢の人が出て来たが、私たちは始めからがんばっていたので先頭にいた。やがて 両陛下のお姿が見えてきた。天皇に一步遅れて、美智子さまが藤紫色の和服を召され、にこやかに歩まれる。この神々しいお姿に思わず頭が下がる。戦争や災害による被害者への

お見舞、外国への親善の旅、お二人で行かれた足跡は数知れず、常に国民と共にあるとのお気持ちが、ひしひしと伝わってくる一瞬であった。

平成の三十年間、象徴としてのお務めを立派に果たされた両陛下に、心から感謝申し上げながら、今日穏やかに令和を迎えた。

我が町・秦野の歴史と現在(5)

北林文夫 (86歳)

葛葉川ふるさと峡谷

葛葉川一帯の地質は丹沢層群の大山亜層群に属し、基盤は緑色凝灰岩(グリーンタフ)です。葛葉川は、水無川とともに秦野盆地に複合扇状地を、また河岸段丘を形成しています。上流の葛葉大橋から金目川に合流する落合橋の手前の新九沢橋の下まで、谷深く蛇行して流れる峡谷「葛葉川ふるさと峡谷」を形成しています。

峡谷の特徴

- ①湧水が豊かで清涼、多くの樹木(特に河畔林)や草花、野鳥、昆虫、水生生物など多様な自然を育んでいる。
 - ②峡谷は、約1万7千年前に秦野断層が活躍し、国道246号線沿いに丹沢側が30mほど隆起する逆断層に起因する。
 - ③断層によって押し上げられた葛葉川は、流路をもとめて浸食して下刻、蛇行し九沢と言われる深い谷を形成している河岸構造をしている。
 - ④浸食された河岸には箱根、古富士、御岳山の火山灰の各地層、岩倉、葛葉台礫層などの露頭、さらには秦野断層の活動の形跡を見ることが出来る。
- 「葛葉川ふるさと峡谷」は地質学的な状況が凝縮して存在することで、秦野のジオパークと言っても良いところです。

葛葉緑地について

葛葉峡谷を含む一帯を「葛葉緑地」と称しています。この「葛葉緑地」が1987年(昭和62年)、「かながわのナショナル・トラスト緑地」第1号(17ha)に指定されました。

既に秦野市は環境省から快適環境整備事業推進地域の指定をうけて「秦野アニメター・タウン計画」を策定し、その21のシンボル事業の一つとして「葛葉川ふるさと峡谷整備事業」をすすめており、1988年(昭和63年)基本計画が策定されて「葛葉川ふるさと峡谷」が認められたのでした。

事業推進のため1991年(平成3年)「葛葉川ふるさと峡谷保全研究会」が設置されて、葛葉緑地のあり方をはじめ、その設備、運営などが検討されて実施されてきました。

管理運営の中心として1998年(平成10年)、くずはの家が設置され、専門のスタッフが配置されました。またそのサポート組織として、くずはの友の会、現在の「くずはの家ボランティアの会」や「くずはの家えのきの会」が設置されています。そして秦野市の環境共生課の管理下で自然環境関係の諸活動を実践しており、環境保全の拠点として、役割を担い現在に至っている。

「葛葉川ふるさと峡谷」は、どのようにしてできたのか

- ① 葛葉川は、丹沢山地を背にして真直ぐに流れていました。
- ② 約1万7千年前、秦野断層が動き海側から山側へ押す力が働き、山側の斜面だったところが持ち上がり大きく隆起して大地になりました。上盤（山側）が下盤（海側）に対してズリ上がったもので、逆断層と言われます。川は隆起した台地を下方浸食して谷を作り、側方浸食をして蛇行して流れるようになりました。この蛇行を九沢と呼んでいます。
- ③ 流れるところがほぼ定まり、地面の下方浸食を続け、現在のような峡谷となりました。

吉沢（きさわ）ローム層

くずはの家から吊り橋を渡り、右に曲がって河原に出ると大きな地層の露頭「吉沢ローム層」が見られます。「吉沢ローム層」は箱根噴火が最も集中した時期の約12万年から10万年前の2万年ほどの間に噴火した軽石層です。当初、平塚市の吉沢の地域で確認されたため、その地名をつけて呼ばれていますが、現在では噴火の状況が確認できる数少ない貴重な露頭となっています。

「吉沢ローム層」はKlpテフラ群とKmpテフラ群の2層が見られます。（テフラ火山の爆発的な噴火によって放出された火山碎屑物）

Klpは火山碎屑物と火山灰でKlp1～klp16の地層がありますが、峡谷ではklp13、klp14の2層の地層を見ることができます。（Kは当初発見された地名「吉沢・きさわ」の頭文字で、lは地層の位置下部を示します。pはパミスー軽石。数字は地層の番号を下層から配番したものです）Klp15、Klp16の2層も確認されたこともありましたが、現在は消失しています。

Kmpは、火山碎屑物（軽石）のみでKmp1～Kmp12（Kは上記と同じ。Mは地層の位置中間部を示し、pは上記と同じ）の地層があり、峡谷ではKmp3の層は見られない。

箱根火山の噴火を起源とする火山灰

箱根火山の活動は60万年前頃、から始まり、40万年前頃から活発になり小型の複成火山が多くできました。23万年前頃からカルデラができるような爆発的な噴火が続き、6.5万年前さらに4.9万年前には神奈川県全域、そして東京におよぶ大噴火がありました。現在も「東京軽石」「東京軽石流堆積物」(TPfl)を各地にみることが出来ます。

吉沢層の火山灰は箱根の代表的なものです。箱根火山の火山灰に含まれる鉱物は、斜長石、輝石、磁鉄鉱から成り、かんらん石はまれです。

関東ローム層について

約40万年前から箱根火山の本格的な活動が始まり、大量の火山灰や軽石が丹沢の南面から、県下に降下し堆積しました。そして1万年前から富士山の活動が（古富士火山8万年前）から大量の火山灰を降下、関東南部に堆積し関東ローム層を形成しました。

古い順に、多摩ローム層、下末吉ローム層、武蔵野ローム層、立川ローム層、と区分される。

中国の古い詩は、日本では「漢詩」と呼ばれる

中国の古い詩は古くから日本に伝わっており、日本では「漢詩」と呼ばれている。古来、日本人は漢詩(漢籍を含む)を理解するために、漢語の各語の意味を日本語に訳し、日本語の助詞を付けて語の関係を明確にし、その後印を付けて和文に整える「訓読」という方法を発明した。これを「漢籍読み(漢文に返り点等の訓点を付けて読む読み方)」方式という。人名、地名、山川や建築物等の固有名詞は訓読している。

また「王」「畜」「徳」「孝」「仁」など、翻訳も訓読も出来ない単語は、中国語の発音の通りに読む「音読(表音文字)」と言う。音読は、日本に伝わった年代と発音区域が異なるため、「呉音」、「漢音」、「唐音」の三種類の発音がある。

「呉音」は最初に入ってきて7世紀頃に日本に伝わり、古代中国の揚子江下流域の呉地方の発音である。

「漢音」は8世紀後半に伝わったもので、古代中国の長安地方の発音を、遣唐使や留学生が日本に伝えたものである。

「唐音」は、11世紀に古代中国の揚子江下流域から日本に伝わり、主に禅僧や日本との往来をする商人たちによって伝えられた。また、「慣用音」と呼ばれる古来からの一般的な発音もある。

「訓読」と「音読」を主軸とした読書法は、一大発明であり、中国文化の理解と同化に大きな役割を果たしたのである。訓読と音読の両方が必要なことからツールとして、934年頃出版された『倭名類聚鈔』(『和名類聚鈔』ともいう)から、現在の『漢和辞典』まで様々な物がある。中国語の日本語の意味(訓読)を調べるのに便利な辞書で、その単語の発音(呉音なのか漢音なのか唐音なのか)についても詳しく解説している。これは、日本人がいかに中国文化を理解し、吸収することに力を注いできたかを示している。

日本人は漢詩を理解するだけでなく、朗読や暗記を楽しんでいた。漢詩の朗読に「詩吟」という独特の方法がある。臍の下の丹田から澄んだ太い声を出し、独特のスタッカートで唱え、その音は空気を振動させ、力強く説得力がある。

“詩吟”が最も栄えたのは江戸中期から明治維新にかけてで、今でも書道を習うように“詩吟”を学び、練習する人がいる。江戸時代後期の著名な儒学者、広瀬淡窓(1782-1856)は、私塾「咸宜園」を開き、生徒の教育の一環として詩吟を教えた。この時の「詩吟」の曲調が、現代の「詩吟」の主流となっている。詩歌・吟遊詩人の定番の書籍として佐々木孝吾の<定本詩吟集>がある。

漢詩を理解し、誦んじることが、昔の日本人の文明教養の高さを示すものであり、今でも多くの人が漢詩、特に唐詩の詠唱を楽しんでいる。

特に好きな詩は、王維「送元二使安西」、李白「静夜思」和「秋浦歌(その15)」、杜甫「春望」、孟浩然「春暁」、朱熹「偶成」、劉希夷(劉庭芝)「白頭翁」、項羽「垓下歌」、蘇軾「春夜」、高禡「胡人問」、白居易「長恨歌」、陶淵明「雜詩十二首」などなどである。

数名の友達と日本の長崎雲仙に遊びに行った夜に食事をして歌を歌い、私は中国語と日本語で杜甫の「春望」を暗唱した。翌朝、昨晚夕食を運んでくれた中年のホテルマンが、「昨夜のあなたの詩の朗読に感動した」「私も学校でこの詩を勉強した」と言ってくれた。手書きの書を手にとってみると、字も正しく、間違いもなかったので、サインをして返すと、お礼に頭を下げた。日本の一般市民がこれほどまでに漢詩を愛していることに驚き、漢詩が大好きな文学の宝庫として、日本の文化に完全に溶け込んでいることを実感したのである。

日本では漢詩の研究が深く詳細に行われており、吉川幸次郎・三好達治共著『新唐詩選』、前野直彬注解『上・中・下唐詩選』、陳舜臣『新唐詩選』、吉川幸次郎・小川環樹共編『中国詩人選集』『中国詩人選集・二』、石川忠久監修『新漢詩紀行』、竹内実編『漢詩紀行辞典』、松浦友久編植木久之・宇野直人・松原朗共著『漢詩辞典』、宇野直人『漢詩の歴史』等等。

日本人は漢詩を研究し、鑑賞するだけでなく、漢詩も創作した。日本における最古の漢詩集は751年に編纂された『懐風藻』で、貴族や官僚が書いたものを中心に120巻が収められている。次に、818年に編纂された勅撰集『文華秀麗集』には148首の詩が収められている。以下は、現在でも暗唱されている例である。

室町時代の日本の僧、絶海中津(1334-1405)は、1368年に大陸に渡り、1376年に明の洪武帝を訪問した時に作った詩：

應制賦三山
熊野峰前徐福祠
満山薬草雨余肥
只今海上波涛穩
万里好風須早帰

注) 明の皇帝の命により詠まれた詩。熊野とは紀州の熊野のことで、徐福が上陸した地と言われている。

頼山陽(1780-1832)は、江戸時代後期の有名な儒学者・歴史家の詩

題不識庵擊機山図
鞭声肅肅夜過河
曉見千兵拥大牙
遺恨十年磨一劍
流星光底逸長蛇

注) 武将上杉謙信が率いる軍と、上杉謙信の攻撃から逃れた武田信玄が率いる軍との対決が描かれている。

釋月性(生没年不詳、江戸時代の浄土真宗の僧)の詩。

将東遊題壁
男兒立志出郷関
学若無成死不還
埋骨何期墳墓地
人間到处有青山

西郷隆盛(1827-1877)は、明治維新の功労者で、南洲と呼ばれた。参議に任ぜられ近衛都督、陸軍大将等を経て、西南戦争の中破れて自尽。

偶成

幾歴辛酸志始堅
丈夫玉碎恥輒全
我家遺事人知否
不為児孫買美田

竹添井井(1842-1917)は、明治時代の漢学者で、中国・北京で外交官を務めた。

劍閣(一部)

不入劍州路
焉知蜀山奇
曲折鑿成道
夾崖压人危
半峰以上峭之而立
氣冲霄漢勢劣岌
裾腰一帶乱石圍
鉄色暗黯黝晴猶湿

重野安繹(1827-1910)は、幕末明治期の中国学者。

西伯利亞車中作

無辺豊草飽羊牛
日没平原余景脩
說是蘇卿牧羝処
雁声独帶漢時音

滑川澹如(生没年不詳)は、上海で『同文滬報』を經營していた明治時代の中国学者・画家。

夢游天童

昨夢游天童
覺来猶在目
心逐白雲輕
身在白雲麓
孤塔昔鎮蟒
危石瓏韜玉
雲松寺門青
丛竹一徑緑
寺後澗泉鳴
淙淙奏琴筑
此声非人間
如聽天上曲

石川忠久(1932-)は、日本の現代漢詩の詩人である。

再び中国の昔の住居を訪れた際に作成した詩

三訪滬城三到此
每來此館最懷君
遺芳歷歷眼前在
魯迅先生手漢文

漢詩は日本の文学や芸術と完全に融合し、深い影響を及ぼしている。紫式部が11世紀初期に書いた日本古典で有名な「源氏物語」は四代帝王の人生を描いた物語である。その中で白居易の「長恨歌」の影響を受けているのが見受けられる。

1702年に松尾芭蕉が書いた古典的な奥州道中記には、李白の「桃梅園春夜宴」の序文に「天地は万物の逆旅 光陰は百代の過客なり」とあるように、漢詩の影響が随所に見られ、白居易の「長恨歌」では「空では羽の鳥に、地上では木の枝になりたいと願う」、杜甫の「春望」では「国破れて山河あり、春の都には草木深く、花は時を感じて涙を散らし、鳥は別れを嫌って怯える」、蘇軾「早晴雨後の湖上酒」では「水は清好く溢れ、山は空、雨をも奇としている」とあり、西湖を西子（伝説的な美女・西施）に比べようとすれば、薄化粧と厚化粧は常に適切なのである。

上記の滑川澹如の詩で、「この声は人間のものではない、天上の歌を聴いているようだ」というのは、杜甫の花卿の「この歌は天上にしかないはず、地上では何度聴けるか」というウィットに富んだパロディである。

武島羽衣作詞、滝廉太郎作曲の日本の名曲「花」の第三節の歌詞は、明らかに蘇軾の「春の夜」の言葉「春の一瞬は千金なり」を意識したものであろう。中国の古詩と日本の漢詩は、情緒と知恵の表現であり、両国にとって共に語り継ぐべき貴重な文学の宝庫となっている。

2018年2月1日(木)

リトアニアで1万人のユダヤ難民に日本通過ビザを発給、
彼らを窮地から救済した日本の外交官；杉原千畝とはどんな人だったのか

佐川雄一（86歳）

第3回

杉原千畝の幼年期と人格形成に影響を与えたハルピン学院

杉原千畝は、1900年1月1日、岐阜県加茂郡八百津（やおつ）に生まれた。父；好水（よしみ）、母；やつ。

好水は収税官吏、貧困に苦しむことはなかったが豊かな家庭でもなかった。杉原が10歳の時、朝鮮半島が日本の支配下になると父；好水は、より高い収入が得られる朝鮮総督府財政部に職を求めて単身赴任する。それ以降、杉原は多感な少年期を父親不在で過ごすことになる。

さらに千畝に衝撃を与えることが起こった。国民から敬愛されていた明治天皇の崩御（1912年）と天皇の逝去を悲しんで日露戦争の英雄；乃木希典の殉死である。いずれも千畝が深く敬愛した偉人であった。

激変する環境の中で、千畝は1911年小学校卒業、6年生の成績表は全甲であった、1917年旧制中学校卒業、その後、英語の教師を夢見て、1年浪人の後、1918年、早稲田大学高等師範部英語予科に入学する。2年生になったとき、外務

省がハルピンで創立される国立日露協会学校の入学試験(“授業料がタダ、生活費支給”)を公表すると、これこそ自分が学ぶところと受験、無事合格する。1919年入学。

ハルピン学院の授業数は週36時間、その半分がロシア語関連、その他に第2外国語、倫理学、中国古典、体育学、経済学、財政・簿記、中国とソ連の地理など、この地域で必要な科目が並んでいた。教授陣はその道の専門家が配置され、国粹主義に偏る内地の教育現場とは異なる自由な雰囲気の日露協会学校には漂っていた。課外学習も盛んだった。可能な限り、“見て、聞き、会い、学べ”を学生に実行させた。

1920年11月、二年生の勉学をいったん休止し、軍事教練を受けるため朝鮮半島に行く。軍隊生活は16ヵ月続いたが、その間に伍長昇進試験に合格、予備役の曹長になった。1923年、ハルピン学院を、優秀な成績で卒業する。卒業生は46人、そのうち杉原千畝を含む3人が外務省にロシア語通訳として採用された。この時、後藤新平は、内務大臣兼帝都復興院総裁を兼務していたが、外務省(当時、日露協会学校の主管省)の採用(3人)について松平恒雄次官に感謝状を送っている。

『われわれが運営している日露協会学校ハルピン学院は、貴省のおかげで着実に発展しています。昨春には46人が卒業し、内3名が通訳として貴省に採用されました。これは、われわれの大いなる誇りとするところです』



← 1933年ころのハルピン学院校舎外観

さらに杉原は、卒業後、再び日露協会学校の特修科に通い、ロシア語とロシア関連の学習を徹底的に指導された。1925年3月、特修科を卒業する。このため、ハルピン学院の同窓会名簿に、杉原千畝は、特修科の「特」と記された。その特別学習を受ける間、1924年11月、予備役少尉の昇進試験に合格している。

杉原は彼の持つ特殊才能が認められて、[1926年](#)には、800ページにわたる『ソヴィエト聯邦國民經濟大觀』を満鉄調査部で書き上げ、関係者から高い評価を受けた。又、1929年から3年間、外務書記生の身分のまま母校・ハルビン学院でロシア語講師を務めた。

さらに、後藤新平が描いたハルピン学院の校則「人の世話になるな、人の世話をせよ、報酬を期待するな」を千畝は満州で率先垂範した。卒業生の多くが満州で働くことを考慮した後藤は、校則を通して、現地の人たち(満州人、中国人、ロシア人、日本人)に対する接し方を学生に周知徹底させていたのである。

ここで、杉浦の人格形成・生き様に大きな影響を与えたハルピンの国立日露協会学校(のちのハルピン学院)に触れておきたい。日露戦争後、日本はロシア・中国との交流を促す重要性を認識し、後藤新平が中心になって日本・ロシア・中国を繋ぐ人材の育成を目指し、1919年創立したのが旧制専門学校;国立日露協会学校である。

その後、1932年、名称はハルピン学院に変わり、1940年には満州国立大学ハルピン学院と改称された。杉原は、在学時、初代学長;後藤新平(初代満鉄総裁)が創った校則;自治三決『人のお世話にならない、人のお世話をする、そして報いは

求めない』に深く傾倒していた。

或るとき、洪水が起き満州人の住居が水浸しになった知らせを受けると、杉原は直ちに現場に駆けつけ、泥水の中を歩いて満州人の家に近づき、彼らの救済にあたったという。このように、日本から遠く離れた外地での生き方を教えられた杉原は、後年、カウナスのユダヤ人が直面する深刻な懸念を目の当たりにすると、限られた時間のなかで、何をすればよいのか、杉原個人のリスクで決断することになった。

ドイツで医学を学び、多彩な能力を持ち、“大風呂敷”と呼ばれる後藤新平が杉原の mentor(良き指導者) になったと考えられる。杉原と後藤の接点はどの程度あったのかわからないが、後藤の植民地経営の発想はユニークであった。日本の既得権益層から見れば素直に評価されるものではなかったが、日本植民地体制の前線基地；満州に置いては、後藤の思考を受け入れる官僚も少なからずいた。杉原も後藤のビジョンを学び成長したひとりである。ユニークさとは何であったのか。

後藤は、台湾で民政長官を経験しているが、後藤には現地の人たちにある種のシンパシー(愛情)を持って接する姿勢があった。後藤は、台湾の統治には直接・間接含め、8年ほど係わったが、その原点は現地文化・慣習の尊重、インフラ整備(交通網、港湾、医療、上下水)と地場産業(砂糖)の育成であった。満州でも現地文化・慣習の尊重に配慮する姿勢を貫いた。

後藤は、台湾から帰国した後、初代満鉄総裁として満州に赴任したが、海外での統治・経営には後藤の大胆さ・ユニークさが求められたのではないだろうか。日露協会学校創設の狙いは正に、現地社会との融和を促す日本人材の育成にあった。杉原はユニークな後藤新平の遺訓を学びながらコスモポリタンな思想を育んでいった。

山縣有朋について-その2-

臺 一郎 (75歳)

昨年(2019年)の天地 12月号の『山縣有朋について-その1-』では、明治42年に伊藤博文がハルピン駅頭で朝鮮人独立運動家に暗殺されたことを知った山縣が、その悲しみを詠んだ和歌を紹介して終え、以下は次号に続くとした。

かたりあいて 尽くし人は先立ちぬ 今よりのちの 世をいかにせむ

(その続き)

このように、山縣有朋は人生の節々で多くの和歌を詠んだ。有朋の父である山縣三郎有稔は足軽身分の下級武士であったが、和歌を趣味としてこよなく愛したために有朋も幼少より和歌に触れて育ち、長じて後も折に触れ何かあれば歌を詠むのが習慣となっていたようだ。

例えば奇兵隊で共に戦った高杉晋作との死別に際しては、「亡き人の 魂のゆくえをつけ顔に をちかえりても 啼くほととぎす」と詠み、陸軍の部下で山縣と同郷の児玉源太郎大将との死別では、「越えはまた 里やあらむと頼みみて 杖さへ折れぬ 老いの坂道」と詠んだ。また山縣が70歳で小田原に別邸古稀庵を完成させたときには、「うちわたす 相模の海を池にして あふく箱根は 庭の築山」と詠んでいる。ちなみに山縣が生涯に詠んだ歌の数は数万首にも及ぶと言われている。

作庭もまた和歌と共に、山縣が大変熱心に取り組んだ趣味である。明治 11 年(1879 年)に完成した東京の私邸椿山荘の庭園、そして明治 28 年(1896 年)京都南禅寺の近くに建てた別荘無隣庵の庭園、さらに明治 41 年(1909 年)に完成し、結局老いのすみかとなった小田原古稀庵の庭園の三つは、山縣が作庭した三名園と言われている。

このうち椿山荘は山縣が 40 歳の時に、上総「久留里藩」の下屋敷のあった東京目白台のつばきやまの土地 6 万平米を買い入れて邸宅を作り、椿山荘と命名したものの。池、せせらぎ、築山、芝生園地などからなる日本庭園で、その景観は山縣の故郷長州萩のそれを再現したと言われ、自然趣味に溢れた名庭園と言われた。

京都の無隣庵は山縣 47 歳の時に南禅寺や疎水に隣接した土地 3100 平米に建てられた別荘だ。その庭は疎水から引き込んだ水で池やせせらぎを作った池泉回遊式庭園で、京都では御所の庭園に次ぐ名園と言われた。また、敷地内の洋館は、対露方針を巡って山縣有朋、元老伊藤博文、首相桂太郎、外相小村寿太郎による四者会談が行われた場所としても知られている。

最後の小田原古稀庵は、山縣が 70 歳の時に、現在の小田原市板橋地区に 16300 平米の土地を買って建てた別邸であったが、晩年には実質的な本宅となり山縣最後の邸宅となった。庭園は高低差 15m の土地を上段、中断、下段の三段に分けて構成され、箱根山と相模湾を借景にした見事な庭園である。

山縣の邸宅や別荘の庭園はいずれもその土地で評判の植木職人と共に山縣自身が作庭に深く関与して作り上げられた。こうした実績から、山縣は日本有数のガーディアンとも言われ、その才能は素人の域を遙かに超えていた。

ところで山縣と言えば長州出身の軍人を中心にした強力な山縣閥を作り上げ、軍政や国政にしばしば露骨な影響力を及ぼした人間として今日に到る不人気の主たる理由となっている。何故山縣は長州出身者を中心とする派閥の結成にそこまで拘ったのだろうか。文春文庫「山縣有朋」の著者伊藤之雄は次のように分析している。

それは単に山縣が長州の出身だからということではなく、1864 年の禁門の変以来の幕府方や佐幕派との軍事衝突に於いて長州出身者が常に他藩以上に多くの犠牲を払い、維新の先頭に立って戦ったという誇りと、長州出身者への深い信頼によるものだろうと分析する。また山縣が強力な派閥を作ることで軍事や軍政に影響力を及ぼそうとしたのは、陸軍の近代化と拡張に愚直に取り組むことで、大久保利通や伊藤博文らが目指した富国強兵という国家像の実現を支えようとしたのではないかと伊藤之雄は考察している。

さて、最後に山縣という人間を生み出した、江戸末期に近い天保年間という時代について少し考察してみたい。

天保年間には 1830 年から 1844 年に到る僅か 14 年間の時代であるが、その間に生まれた逸材や傑物はざっと調べてみただけでも

天保元年：吉田松陰(長州)、大久保利通(薩摩)

天保四年：木戸孝允(長州)、

天保五年：福沢諭吉(中津)、岩崎弥太郎(土佐)江藤新平(佐賀)

天保六年：坂本龍馬(土佐)、松方正義(薩摩)井上馨(長州)

天保八年：板垣退助(土佐)

天保九年：山縣有朋（長州）、大隈重信（佐賀）

天保十年：高杉晋作（長州）

天保十一年：渋沢栄一（武蔵）

天保十二年：伊藤博文（長州）

天保十三年：大山巖（薩摩）

天保十四年：西郷従道（薩摩）

と17名もいる。その全員が生誕後ほぼ180年以上を経た今日まで歴史に名を残している。また彼らのうち長州が6名、薩摩が4名、土佐が3名、佐賀が2名と維新の中心となった薩長土肥の四藩で15名を占めている。なぜ天保年間という短い時代に、西国のそれも限られた一部の藩から、これほど多くの逸材や傑物がこの世に産み出されたのだろうか？

「それは幕末の尊皇攘夷運動や明治維新の中核となって推進したのが、薩長土肥などの西国の雄藩だったから」というのは因と果を取り違えた解釈の様にも思える。なぜなら、天保年間にこの世に生まれ出た前記の逸材達が先頭に立って活躍・主導したからこそ、薩長土肥等の西国四藩は尊皇攘夷や明治維新で中心的な役割を果たし得たと思うからである。

非科学的であることを承知で言えば、天がそのように、すなわち「その時期に」、「その場所に」、「前記のような逸材達が」、「現われる」よう采配したとしか思えないのである。

こうした不思議な偶然は、薩摩藩城下の「加治屋町」（現在の鹿児島市加治屋町）という小さなコミュニティから、幕末のほぼ同時期に、西郷隆盛、大久保利通、東郷平八郎、大山巖、山本権兵衛など後世に名を残す大人物が何人も現われたことにおいて、より象徴的であり、暗示的である。歴史小説家の司馬遼太郎氏はかつて加治屋町について、「いわば、明治維新から日露戦争までを、一町内でやったようなもの」とその不思議さを指摘した。

「天保年間」にせよ、「加治屋町」にせよ、歴史は時に天の采配としか思えないような不思議な偶然や結末を見せてくれる。



有楽町 慕情 (4) 「日本倶楽部」

津田孚人(85歳)

「ネットワークテーブル」に、永い間寄稿を続けてくれていた”伊那闊歩”さん、中学、高校を共にした仲間です。本名は久保礼次郎さん、東工大を出て、湯川研究室、大学教授と学究の道を歩いた物理学者。天地に寄稿し始めたころ、原稿料も無しに原稿を書くとは・・・と奥様に呆れられたそうだが、書くことが好きということで、幅広いジャンルのテーマの文章を、無料で送ってくれた。学者らしい、筋の通った、格調高い内容の文章は、「天地ネットワークテーブル」の路線作りに大変寄与してくれた。

現在、京都在住、書きたいことが少しあるのでいずれと言うので、待っているところだが、2月初めに「小学生のとき、父親に連れられて父の事務所があった日比谷のビルに行った記憶がある。事務室の窓から皇居が見え、ビルの中に第一生命の事務室があった。GHQの入ったビルではなかったと思うのだが、どういうことだったろうか？」という電話があった。

彼の父上は、近鉄なので、日本倶楽部を訪ねたようだ。日本倶楽部に第一生命の事務室が同居していたというのは知らなかったが、第一生命館の履歴書には、こんな文章がある。

「終戦当時、第一生命館の北側に道路を隔てて小ぢんまりとした日本倶楽部の建物があつた。これが憲兵司令部用に接收されそうになつたので、第一生命が三階の東南隅の大部屋を借りて、そこに統計機械課を入れた。ちょうどGHQが開設された9月17日の日であつた。第一生命の機械類は第一生命館の地下3階にあり、30名ほどの人がそこで働いていたが、日本倶楽部の方には、事務系統の者が20人ぐらい入居した。」

早速、伊那闊歩さんにこの話を伝えたが、日本倶楽部のHPを見ると、接收を免れたと出ているが、第一生命の話は出て来ない。

第一生命に入社した昭和36年(1961年)4月頃、有楽町の駅前、銀座側には闇市があり、交通会館もまだ出来ていなかった。堀端側は、「有楽町そごう」は開店していたが、帝劇は未だだった。第一生命の道路向かいの北側、後に帝劇が入る国際ビルのあたりは、板塀に囲まれ、「阪急うどん？」と看板の出た小さな店があつたような記憶がある。しかし日本倶楽部のビルがあつたのは気が付かなかつた。国際ビルは、昭和41年(1966年)9月に完成、帝国劇場、出光美術館が入り、日本倶楽部も入居しているので、かつてその地に日本倶楽部のビルがあつたのは間違いない。

一方、日本倶楽部のビルに一時的に入居した第一生命の統計機械課は、昭和24年5月に統計機械を全部、京橋相互館の筋向いにある分館の一階に移したので、そのとき同時に移転したようだ。日比谷の地下3階にあつた統計器械は、大小合わせて60数個、トラックを往復させて残らず京橋へ運んだ。

この60数台の統計機械、業界でも質量トップの数だった。第一生命は創業当初(明治35年)から種々の計算機や統計機械等により、事務管理全般にわたる研究を重ね、経費の節約と計算の正確、能率の向上に熱心だった。

創業間もないころ、早くも東洋ではじめてミリオネア計算機を使用し、大正14年にはパワーズ式統計機械をアメリカから輸入して事務の利便に供していた。昭和12年、欧米に赴いた石坂泰三専務（※後に社長、戦後、東芝社長、経団連会長など歴任）は、アメリカでホレリス式の統計機械（今日のIBM会計機）に接して、これを設置することを企画し、昭和13年11月、新築の第一生命館に本型式の統計機械68台を設置した。

以上のように、大規模な統計機械が、すべてIBM製（アメリカ製）だったことが、米軍との折衝の上で、大きなプラスになったのではないかと考えるのは、無理ないように思われる。

さて昭和25年6月25日、朝鮮戦争が勃発、GHQは急遽24時間勤務態勢に入り、第一生命館は夜を徹してすべての部屋の電灯が毎夜煌煌と輝き続け、見るからに物々しさを感じさせたそうである。

しかし、米軍では、マッカーサー元帥と本国政府との激しい意見対立が発生し、昭和26年4月11日、トルーマン大統領はマッカーサー元帥を連合軍総司令官から罷免した。マッカーサー元帥は、5年半いた日本を疾風の如く去っていった。

後任のリッジウエイ中将は着任後間もなく大将に昇進、1951年9月8日、サンフランシスコで平和条約と日米安全保障条約が調印され、翌年の4月28日に発効すると同時に、北大西洋軍司令官に転じて、日本を去った。

その後任にクラーク大将が在日米軍司令官として任命され赴任した。着任後しばらくの間6階の総司令官室にいたが、6月中に全員と共に市ヶ谷に移った。

かくして、第一生命館は7年ぶりに空家となり、返還される日を待つのみとなった。平和条約が調印され、昭和27年4月には自由が戻ると国民は期待していたが、一方で米軍の駐留が長く続き、摂取されたビルや家屋が返還されるのは、遅くなるのではという懸念が深くなっていた。ことに、龐大な通信施設が装備されている第一生命館は、米軍としてもなかなか手放すまいと、心配された。

社長の矢野一郎（※昭和22年1月就任）は、連合軍としては占領終結と同時に、即時返還を実行することが最高、最善の策であると考えているはずと考え、思い切って総司令部にリッジウエイ大将を訪ねた。大将は、懇ろに6階の大将の私室に迎え入れてくれた。

矢野は、第一生命館と帝国ホテルは占領の象徴として見られているので、平和回復時には即、この二つを自由にしてほしい、それは日本全体の国民感情に対する最善の策であると伝えた。更に、第一生命自体も9月に創立50周年を迎えるので、ここで祝いたいという願望を持っていることを率直に伝えた。会談は30分ほど和やかに続き、矢野の気持ちを大将は、よく理解してくれたようだった。

第一生命館が、願望したとおりに帰ってくるようになったとき、大将の親切な思いやりがその陰で強く働いたものと、矢野は確信して感謝した。

正式返還は、昭和27年7月7日、七夕の日となった。当日は、午後4時から屋上で返還受領式が行われ、米軍側からは連合軍参謀副長ブライアン少将、日本政府からは特別調達庁次官の堀井氏、第一生命からは矢野社長以下、役職員代表、そしてその他来賓が出席した。

日本政府から第一生命宛に出された「使用解除財産返還通知書」を矢野社長

が受け取り、来賓のあいさつや祝辞の後、近衛管弦楽団員による「君が代」吹奏のうちに、日の丸の国旗と第一生命の社旗が空高く掲げられた。前日までそこには、国連旗と星条旗が掲揚されていた。

翌日から館内の清掃、改修に取り掛かったが、他のビルに見られるような乱暴な使い方はされていなかった。シカゴのイーストウッド将軍から返還を喜ぶ手紙があり、原状が痛められていたかどうかを、強く心配しておられた。

大会議室だけはかなり痛んでいた。ここは民政部がいた所で、ホイットニー少将は奥の小さい部屋に入り、大部屋にはいっぱい机を並べてたくさんの部員が入った。ここは館内で一番人の出入りも激しく、また日本人の怨みが一番強かった部屋でもあった。

美しい寄木の床を護るために厚い敷物を敷き詰め、床と敷物との間には各机ごとに電気スタンドをつけるため配線を巡らせてあった。四方の大壁は西陣の絹織物で張られていたが、その下部は一様に痛んでいた。米人は疲れると壁に足をあげる癖があるので、その跡であることは明らかだった。したがってこの部屋の修理だけは、後になってから大改修を要した。

返還された本館は8月中旬までに一応手入れを終わり、9月1日から営業と決まったので、それに先立つ8月22、23の両日、契約者や各界名士達に観覧の機会を提供した。

この歴史的な家を一目見たいという人の数は日毎に増え、新しい東京名物となった。そして国中の評判となり、毎日のように参観者の列が絶えることはなかった。

(つづく)

事務局

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-118

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX：03-3819-7651